

男女共同参画社会をめざす

アゼリア

# Azalea

特集／人生のハードルを軽やかに

東京都北区  
Vol.15  
平成10年3月



# 人生のハードルを

## 軽やかに



●特集  
人生のハードルを軽やかに  
聞き書き自分史  
●聞き書き自分史  
「看護婦」を選んだ私  
●第四期北区女性海外派遣事業  
グレート・ハーモニーの国のジグソーパズル

少子高齢化の進展や産業構造のソフト化は、個人のライフスタイルに影響を与え、女性の生き方にもさまざまな可能性が広がっています。また、男女雇用機会均等法や育児・介護休業法が改正されるなど男女共同参画を推進するための法的な整備はなされつつあります。しかし、その一方で、景気の停滞や倒産・リストラ、賃金格差、長時間労働など、女性をとりまく状況には依然としてきびしいものがあります。また、人々の意識にもなかなか変わらない部分があります。人生には、男女ともにさまざまなハードルがありますが、殊に女性が軽やかにハードルを越えるのは、厳しいことが多いようです。なぜ難しいのでしょうか。それぞれの人が個性を發揮できるようにするには、どうしたらよいのでしょうか。あるご夫婦や北区民へのインタビューも交えて考えてみました。

### 女性にハードルはより高い？

北区民へのインタビュー(下表1参照)では当面の心配事(ハードル)として仕事・育児・介護などが挙げられました。男性の関心は主に仕事ですが、性別を越えて多くの年代で共通して心配だと意識されていたのは老後のことでした。少子高齢社会が進み、働く世代が減少する中で、老親や自分がどうなっていくのか不安なのです。

女性も男性も人生の節目ごとにより越えなければならぬハードルがあります。就職・結婚・出産・育児・介護などは、男性ならば比較的それまでの生活ペースを変えずに対応できます。しかし、女性は生活が一変する割合が高いのです。就職・結婚・出産・育児・介護に直面し、それまでの仕事、生活を続けるかどうかの選択を迫られるのは多くの場合女性の方でした。

### 望まれる女性の労働力

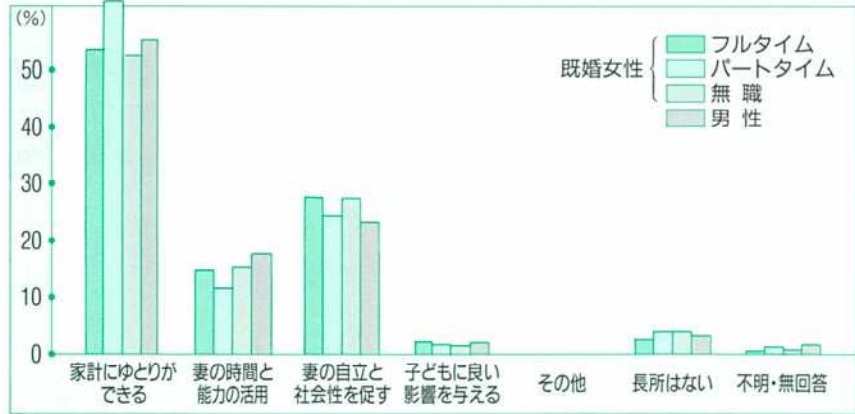
それでもこれからは、少子高齢社会がより進み、労働力が不足することが予想され、女性が働くことに対する期待が高まっています。(図1参照)女性が働くことの長所として家計のゆとりのほかに、自立と社会性が認められています。しかし、今の社会システムのままで女性が働き続けることは、女性に過重な負担を強いることにつながります。(図2参照)

### 少子社会の本当の原因は

今までは女性の高学歴化や社会進出が少子化の原因と見なされがちでした。しかし平成九年にまとめられた「国民生活白書」では女性の社会参加を阻む社会のシステムの遅れこそが少子化の原因であるとはじめて指摘されたのです。

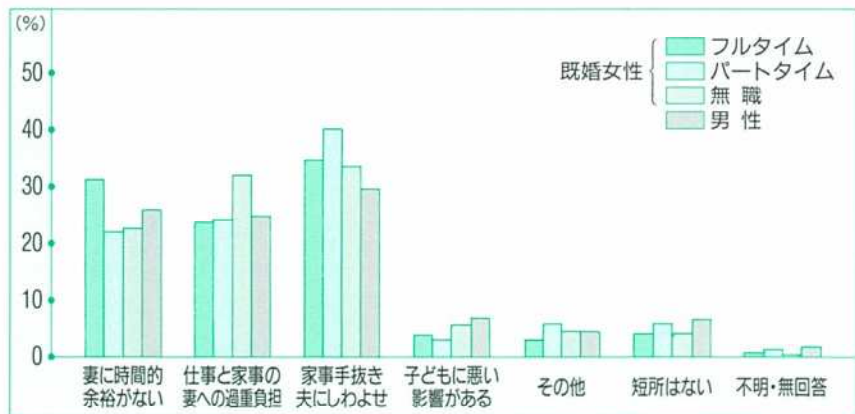
私的支援の指標としての世帯人数や保育サービスの供給面を表す指標としての保育所定員数が多いと、女性就業者の出生率や乳幼児を持つ女性の有業率が高いとの結果が得られた。このことは、女性の就業と出産・育児の両立を支援するための体制が整っている地域では、女性の就業率が上昇しても出生率を低下させずにすむ可能性があることを示している。(平成九年版「国民生活白書」より)

図1 既婚女性が働くことの長所——「家計にゆとり」、「自立と社会性」



(平成9年版「国民生活白書」)

図2 既婚女性が働くことの短所——「余裕がない」、「過重負担」



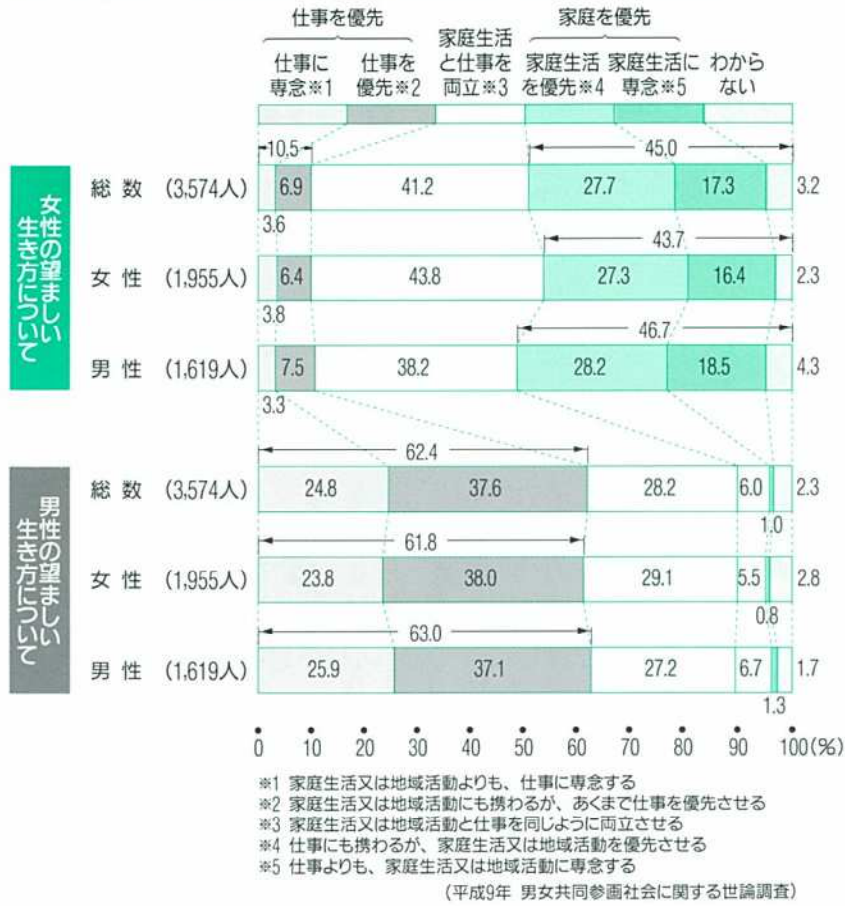
(平成9年版「国民生活白書」)

表1 北区民へのインタビュー

(平成9年11月、滝野川文化センターまつりでお聞きしました。)

| 氏名   | 年齢  | 性別 | 家族            | プロフィール                                  | 家計の負担     | 心配事        | 家事の分担    |
|------|-----|----|---------------|---|-----------|------------|----------|
| Y.K. | 60代 | 男  | 妻             | 退職後はカメラ、旅行などを趣味にしている                    | 年金        | 自分の健康      | 2人       |
| Y.T. | 60代 | 女  | 夫、子ども2人       | 最近自己主張をするように心がけている                      | 夫         | 子どもの結婚     | 本人のみ     |
| T.A. | 50代 | 男  | 妻、子ども2人       | 共働き、妻が働きに出て、生活意識が変わった                   | 夫(6)・妻(4) | 仕事、子どもの教育  | 2人       |
| S.S. | 50代 | 女  | 夫、子ども2人       | パート(縫製)をしているが家計には入れない重要な決定事項は2人で決める     | 夫         | 人間関係       | 本人       |
| T.E. | 40代 | 女  | 独身            | お稽古で知り合った友達や両親との団楽が楽しみ                  | 本人        | 親の介護、自分の老後 | 本人       |
| M.M. | 40代 | 女  | 夫、子ども2人(専業主婦) | P.T.A.、スポーツをやり、ハリキッている                  | 夫         | 介護         | 妻のみ      |
| M.Y. | 40代 | 女  | 夫、子ども3人、義母    | 自立と生きがいをもとめて、友人と介護専門の会社を設立、自宅で着付指導もしている | 夫(9)・妻(1) | 多忙         | 土日の料理のみ夫 |
| T.I. | 30代 | 男  | 母、妻           | 母の今後の生きがいを探し中                           | 夫・妻       | 母          | 2人       |
| M.O. | 30代 | 女  | 夫、子ども2人       | フルタイムで仕事をしているが同年代の友人に触発されて最近ボランティアをはじめた | 夫・妻       | 多忙         | 妻(主に)    |
| D.I. | 20代 | 男  | 妻、子ども         | 趣味(スポーツ)も子どもと一緒に楽しめるもの                  | 夫         | 仕事         | 2人       |
| Y.T. | 20代 | 女  | 父(単身赴任)母、妹    | 卒業を前に自分の将来を模索中の学生                       | 父         | 仕事、結婚      |          |

図6 仕事と、家庭生活又は地域活動について男女の望ましい生き方



なお同じ調査で、少子化の理由としては「教育に金がかかる」(五八・二%)、次いで「経済的余裕がない」(五〇・一%)や、「仕事と子育ての両立が困難」(四四・七%)が挙げられました。

**男の評価は何でかまね?**  
 なぜ「男性は仕事」なのでしょう。なぜ女性のように家庭との両立を考えられないのでしょうか。それは「男の評価は社会的な地位と収入で決まる」という価値観に程度の差こそあれ、男性女性を問わず多くの人が縛られているからではないでしょうか。  
 つまり、「男は仕事を優先」という生き方は、男性だけではなく、自分の夫や息子に高収入と社会的な地位を望む女性も一緒に支えている生き方なのか

**あなたなら、どうするの?**  
 「自己点検」を話しかけてあげてくださいか?  
 急速な少子高齢化が進み、不況によるリストラ、長時間労働など労働状況

A新聞に「育児父さんの成長日記」という連載があって、二人目の子どもが生まれたとき、育児休業を取った夫(電機メーカーエンジニア)が、その間の専業主夫ぶりと、その時々々の気持ちをつづったものでした。  
 男女の固定的な役割分担を見直した、新しい生活形態をとる夫婦が出現していること、また、そこにあった彼の心情―子どもへの愛情と単調な主夫業への苛立ち、パートナーの支えを必要としている気持ち、育児により新しい視点を体得した実感などが伝わりました。  
 男性の中にも、これまでの「男の」評価にとらわれることなく、「自分の」生き方が選べる人たちが現れつつあります。育児父さんもその中の一人に挙げられるでしょう。



の悪化が問題になっています。  
 経済効率優先でがむしゃらに進んできた社会が揺らぎ、先の見えない不安を誰もが感じる今、男女共にこれまでの生き方、暮らし方を点検して見る必要がありそうです。  
 「そういうものか」と思っていたから「これまではそうだったから」という言葉に逃げずに、自己点検をしてみませんか? あなたは何が大切ですか? どういう生活を望んでいますか?  
 自己点検したならば、周囲の人たちと話し合ってみましょう。オープンに話し合う習慣のない私たちは、自分のことを話すことが苦手。でも、勇気を持って。  
 「黙って我慢」や「察し合い」ではわからないことは、たくさんあります。自分も相手も大切にしている関係には、よりよい明日へのエネルギーが育まれます。

図4 共働き夫婦の勤務時間(平日)

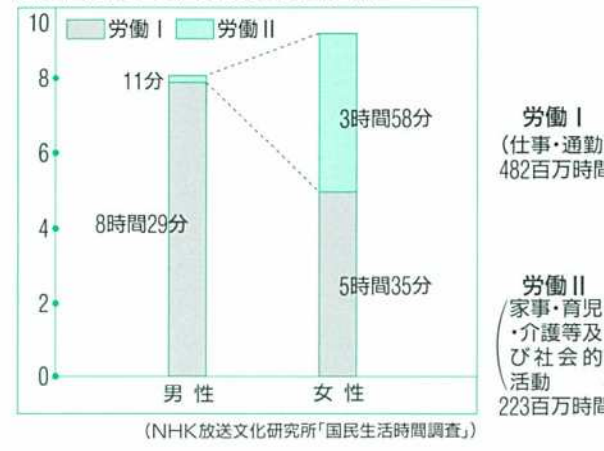
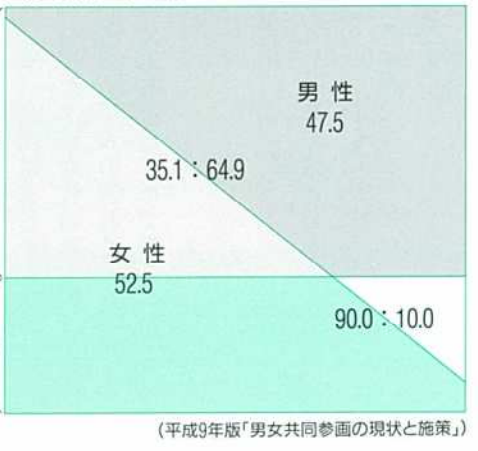
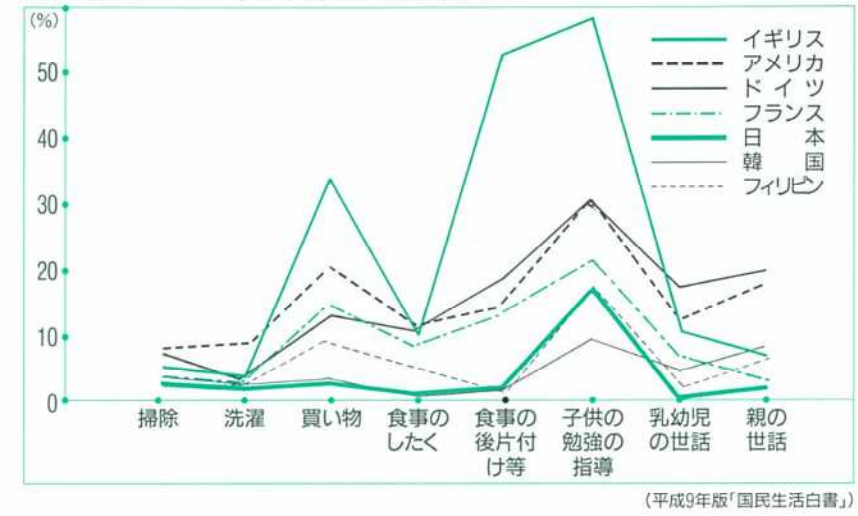


図3 労働の種類と男女比率



このことは図3からも読みとることが出来ます。  
 収入を得る労働を女性は全体の半分近くの割合で担っています。(労働I→女性三五・一; 男性六四・九)しかし同時に女性は家事・育児・介護などの無報酬の労働の大部分(労働II→女性

図5 国際的に見ても低い日本の夫の家事負担



九〇:男性一〇)も同時に担っているのです。ちなみに共働き夫婦では男性の家事関連時間は一分、女性は三時間五八分です。(図4参照)  
 国際的に見ても日本男性の家事負担は低くなっています。(図5参照)  
 この大きな差はどこから出てくるのでしょうか?

男女共同参画2000年プランから

- 第2部 施策の基本的方向と具体的施策 (4つの基本目標と11の重点目標)
- 男女共同参画を推進する社会システムの構築
    - 政策・方針決定過程への女性の参画の拡大
    - 男女共同参画の視点に立った社会制度・慣行の見直し、意識の改革
  - 職場、家庭、地域における男女共同参画の実現
    - 雇用等の分野における男女の均等な機会と待遇の確保
    - 農山漁村におけるパートナーシップの確立
    - 男女の職業生活と家庭・地域生活の両立支援
    - 高齢者等が安心して暮らせる条件の整備
  - 女性の人権が推進・擁護される社会の形成
    - 女性に対するあらゆる暴力の根絶
    - メディアにおける女性の人権の尊重
    - 生涯を通じた女性の健康支援
    - 男女共同参画を推進し多様な選択を可能にする教育・学習の充実
  - 地球社会の「平等・開発・平和」への貢献
    - 地球社会の「平等・開発・平和」への貢献



**「存知ですか?」**  
 高校の家庭科が男女共修となり(一九九四年)、男女共同参画ビジョン、男女共同参画二〇〇〇年プランも提示されました(一九九六年)。  
 男女平等への取組は、国を挙げているものとされています。  
 総理府の行った「男女共同参画社会に関する世論調査」(平成一〇年一月発表)では、「男女の望ましい生き方」をたずねています。(図6参照)  
 女性の生き方では、「仕事よりも家庭生活又は地域活動を優先する」が四五・〇%、「家庭生活又は地域活動と仕事を同じように両立させる」が四一・二%で僅差で続き、「家庭生活又は地域活動よりも仕事を優先する」は一〇・五%でした。  
 逆に男性の望ましい生き方では、「仕事を優先する」が六二・四%でトップ、「家庭と仕事を両立させる」が二八・二%、「家庭を優先する」が七・〇%でした。



水谷 進

滝野川在住  
60歳代  
定年後積極的にボランティア活動に参加。  
現在は精神障害者のための共同作業所  
〈第二ワークインあすか〉の非常勤職員、  
グループホーム〈フレンドハウス〉の施設  
長をしている。

## 歩みを共に

—水谷さんご夫妻の体験談—

結婚、子育て、定年という人生のハードルを  
話し合いで乗り越えてきた  
水谷さんご夫妻に、お話をうかがいました。

### 地域との共生の大切さ

—定年後は北区でボランティアをしていこうと思っただけは、何でしようか？  
進 五八、九歳ぐらいの頃だったでしょう。会社の帰り道、今ここでパタッと倒れたらどうなるのかなと思いましたが、僕を水谷進という名で認知してくる人はマンションの管理人さん以外にいないだろうか。北区に住んで一三、四年になっていたので、活動拠点

—現在は同じ道を歩まれています。結婚当時から同じ方向を向いていたのですか？  
裕子 結婚した時は年が七つも離れたので話が合わなかった。それで会社から帰って来るとラジオも消して、生き方とか暮らし方とか話しました。そういうことをよくやっていたので、お互いの考え方をわかりあえるようになり

進 人間の価値観がこんなにも違うのかと痛切に感じました。新聞の記事を読んでも意見がすれ違ってしま。本当に大切なことを毎日二時間話し合いましたね。子どもができるとその話題になってしまいました。  
—男性料理教室に参加なさったそうですが、家事への協力はいかがですか？  
裕子 お昼ぐらいは作れるようになってほしくて行くようにすすめました。今では二人で家にいる時もお昼は作ってくれます。でもメニューは一種類おうどんだけ。時間があると手打ちうどんを作ってくれます。本格的でおいしいですよ。私が留守の時、自分で食事をしておいてくれるというだけでも気が楽ね。

### 山坂を越えて

—これからの時代、男性の家事参加は不可欠と思われそうですが、どう思いますか？  
裕子 うちの子たちはよくやるわねえ。

を会社だけに置いていたのは、とんでもない思い違いだったということに気がつきました。それで定年になったら仕事はやめるぞと宣言しました。

—年金生活に入ることに不安はありませんでしたか？  
進 当然、妻からは一度は反対されました。でも妻もボランティアを喜んでやっていますので、僕にもやらせろということであとは理解してくれました。

—裕子さんがボランティア活動を始めたきっかけやそれを通して得たものはどのようなものでしょうか？  
裕子 洋裁学校を出て結婚し、子育てをしていました。洋裁や編み物が好きでずっと続けていたのですが、一五、六年前に病気をすることがきっかけの一つです。進 あちこちの病院で妻の病気の原因は極度のストレスだと言われました。家の中ばかりにいたのでストレスがたまったようです。私も責任を感じて、ゴルフに誘ったりしました。その頃から丈夫になりました。

裕子 夫が長期出張になり、社会へ出てみたいなあと思っていた時、友愛ホームサービスが始まりすぐ申し込みました。楽しくてのめり込んでしまいました。ボランティアは利害関係がないし自分のできることだけをすればいいので、気が楽でお友達もたくさんできましたね。初めは夫に怒られたりもしましたが、めげずにやっているのを見て、徐々に考え方が変わっていったん

下の子は料理も上手ですよ。夫の単身赴任中は私が月に一度一週間ほど留守にするので、男の子二人で作っていました。これからは女性も外へ出て働いてほしいし、男性も家事をやってほしい。共同作業でやらなくちゃ。私たちがのように分業はだめよ。  
進 息子の家庭を見て、本当によくやるなと感心しています。帰って来るとすぐ子どもの面倒をみています。あれぐらいやらなくちゃいけないでしょうね。私の時代は楽でした。  
—もし女の子がいましたらどういふうに育ててほしいですか？  
裕子 私はやはり一生働いてほしいです。娘がほしかったですね。もしいた

じゃないかしら。

—裕子さんが外へ目を向けられてボランティアを一生懸命している様子はどうのように見ていたのでしょうか？  
進 横目で見ているという感じかな。僕が妻に言った一番のことは家庭になにかあったら、すぐに身が引けるように準備しておけということです。でももう二人共、どっぷり浸かっていますね。今になるとボランティアといえどもそういうことは難しかったんだなあということがわかります。

—裕子さんは進さんがボランティア活動を始めたことをどう思いましたか？  
裕子 仕事をしていた時はものすごくストレスがたまっていたようですね。今はそういうことがなくなっちゃったんですよ。家にも毎日のように書類を作ったりしているんですが、それでいて頭が痛いとか胃が痛いか言ったことがないんです。私はこれがボランティアだと思えます。自分で楽しんでやれば体にもよいということがわかりました。

### 対話を重ねて

—在職中はどうのような家庭人だったのでしょうか？  
裕子 会社人間でした。子どもの学校にもほとんど行かなかった。家族旅行も仕事になって一泊しかできない。家事も育児も分担してくれませんでしたね。

—これからはどのようにしていきたいと思いませんか？  
進 今は毎日が楽しいです。でも少しずつ自分の時間も作っていききたいですね。これからは障害者の方のおつき合いは続けていきます。  
裕子 ボランティアはずっと続けていきたいですね。歩け歩きの会に入っています。将来老人ホームに入ることがあるかもしれないですが、その時楽しく暮らせるようにいちごクラブも頑張りたいと思います。

### 特集のまとめ

—これからの男女共同参画社会は、男性女性ともに、仕事も家庭もバランスよく担うことを目指しています。  
女性だけが「幸せになりたい」とか、男性だけが「楽をしたい」というのは通じません。男女のどちらかが無理をするのは、結果的には双方を不幸にしてしまうだけのように思われます。  
今必要なのは「共に幸せになる」という考え方です。そのようなパートナーシップを男性と女性は築いていかなければならないと思います。  
「男は仕事、女は家庭」あるいは、「男

は仕事、女は仕事も家庭もきっちり」という性別役割分担をもう一度見直す必要があるそうです。  
新しいバランスのとれた社会にするためには、労働時間の短縮や、休暇制度の普及、福祉サービスの充実などの法・社会システムを変え、同時に、自分自身も含め、社会通念を変えていくことや、十分な話し合いが不可欠です。

—これからは人生の幾多のハードルをもっと軽やかに越えていきたいですね！



水谷 裕子

50歳代  
10年程前からボランティア活動を始め。特別養護老人ホーム(つつし荘)でお年寄りの生活を楽しくするお手伝いしている(いちごクラブ)主宰。  
田端と滝西のエコーひろば館でネクタイからベストを作る講座を持っている。



# 支えられて

「看護婦」を選んだ私

中澤勝子さん（西ヶ原在住）

中澤さんは現在、区内の総合病院で看護部長として勤務しています。ローテーションを組んで取るという、貴重なお休みの日にお訪ねして、お話を伺いました。

## 突然に

中澤さんは、信州佐久の出身です。終戦の翌年、復員して来た父を、母と共に迎えたのは三歳の時のことでした。小海線の「中込駅」に勤める父と、母と祖母、そして中澤さんを挟んで上は兄と姉、下は妹と弟の五人兄妹。当時としては珍しくない大家族でした。一〇歳の時のことです。学校の授業中、担任の先生からすぐに帰るようにと言われました。先に歩く二歳年上の姉を追って、腑に落ちないまま、家まで四〇分の道のりを走るようにして戻りました。

家の中には、いつもと違う空気が漂っていました。今朝『行っていらっしやい』と送り出してくれた母が布団の中にいて、枕許には父や祖母や親戚の人までが座っていました。母の死は、突然訪れました。

幼かったこともあって、母の病気については知らされないうままでした。

## 決心

それからの日々を、中澤さんは『泣き暮らした』という言葉で表現します。落ち着いて物事を考えられるようになってからも、悲しみだけは癒されることはありませんでした。それはやがて、『こんなに切ない思いをする人を、一人でも減らすことができないだろうか』という考えに変わっていききました。

高校生の時、満州（現中国東北地方）から戻ってきていた叔母と何度か会う機会がありました。彼女は四〇代で夫と別れてからは、日本にいた時に身につけた助産婦の資格を生かして、子どもを育てながら生計をたてていました。こ

## 家族

鉄道関係の仕事に就いていた、同郷の幸司さんと、二六歳の時結婚しました。幼い頃母を亡くした境遇は、偶然にも同じでした。

結婚する前には、続けると言っていた仕事も、家事との両立が大変になって、そのうちに辞めるだろうと幸司さんは秘かに期待していたそうです。でも中澤さんは辞めませんでした。自分を待っている患者さんがいるからです。それを理解した幸司さんは、自分が夜勤を終えて帰った日でも家事を引き受けました。

やがて二人の間に子どもが生まれることを知ると、中澤さんは真先に保育園を探しました。仕事を続けることは難しくくない、と考えたのです。今度こそ妻は辞めるだろうと思っていた幸司さんはあわてました。ところが実際に長男が生まれ、子育てに、仕事にと懸命に頑張る姿を見ているうちに、自然に手伝うようになりました。

職場では上司が、子育てをしている看護婦さん達に対して、出来得る限りの配慮で配属部署を考えてくれました。勤務に集中することでその心遣いに応えました。けれども、子どもが熱を出した時などに、夕方から出勤する夫と、一日の勤務を終えた中澤さんとが、擦れ違う道の真中で容態の引き継ぎを交すことは珍しいことではありませんでした。病院の前の横断歩道を家に向かって渡り終えた時には、もう家族のことだけを考えていました。

子どもが保育園を嫌がって、泣きながら登園していた時期もありました。保母さんの思いやりのある言葉に励まされ、背中に泣き声を聞きながら、それでも送り届けた園の前の信号を病院へ向かって渡る時には、今日来院する予定の患者さん達のこと、すでに頭の中を一杯にしていたのです。

参観日や運動会などには極力出席しましたが、駆けつけて、束の間見てはまた戻るといった具合でした。そうした

の叔母の存在は、自分の将来を考える上で、とても影響が大きかったようです。それに、長女には結婚を勧めた父が、『看護婦になりたい』と切り出した中澤さんを、止めませんでした。却って、自立することも必要だ、とすすんだ意見で応援してくれたのです。

昭和三七年、高校卒業と同時に上京すると、現在勤務している病院の敷地内にあった高等看護学校に入学しました。

## 看護婦になるために

難しい医学用語の並ぶ本を手に、四〇科目を越える学科の勉強が始まりました。一科目終わるごとに試験があり、それを一つ一つこなしながら、他方では病院内での実習もありました。言葉に誰の（誰か）があることが気になって、話をするきっかけを作るのには人知れず苦心をした実習生時代でした。この看護学校では入学後、半年程すると新入生に対しての戴帽式（白いナースキャップを許可される式）があります。半年の間はめいめいが自分について考える期間なので、入学後、それまでの看護婦像とその仕事に対する意識に変化をきたした仲間が少なくありませんでした。また、思いがけなく難しく、しかも膨大な量の勉強内容に悩む友人もいて、戴帽することなく、進路を変更した人もいました。時間を使って諦（あきら）めかけられ、『看護婦』となり得る人材に磨かれる必要があったのです。

学校のすぐ隣にあった寄宿舎での生活は、上級生が寮母や舎監の役を兼ねていて、時間については厳しいものがありました。起床後はすっきり掃除を済ませ、七時の朝礼に間に合うように集會室に集まるのです。特に、月曜の朝は必ず『ナイチンゲール誓詞』の唱和をすることになっていました。

こうして中澤さんは正看護婦としての資格を得ました。昭和四〇年、二二歳の春のことでした。

中で何とか予定をやり繰りして計画する年数回の家族旅行は、三人にとって貴重な触れ合いのための努力でした。

## 支えられて

自分が看護婦を続けてこられたのは、周囲の理解と家族の支えがあったからだと言います。

「夫婦が、独身時代より、お互いを高め合うことができなければ結婚した意味がない」

これは夫、幸司さんの口ぐせでした。長男にお米の研ぎ方を教えたのは夫でした。新聞などを読んで、解りにくい問題をぶつかった時、日頃から読書量の多い夫に噛み砕いて解説してもらうひとときは、夫婦の大切な語らいの時間であり、同時に看護とは別の学びの場でもありました。

「離婚しなくても、夫婦はいつかは別れなければならぬ時が来ます。その日まで一緒に居ることは、人間として大事なことでないかと思えますね」

数年前に、夫を病気で亡くした中澤さんのこの言葉は、深く胸に浸みてきます。私は夫に高めてもらったけれど夫を高めるために私は何をしたら、と視線を落として微かにほほ笑んだ目には光るものがありました。

「これからはお世話になった皆さんへの恩返しなんです」と中澤さんは顔を上げます。現在八〇名を数える若い看護婦さん達の長として、その任務に励んでいます。自分でできる精一杯のことが、誰かの役に立つのなら、それが私にとっての誇りでしょうと、きりっとした口調で語り終えました。

最新の技術を身につけた医師と、求め得る最良の治療を望む患者との間に立って、心の通った看護を行う努力を惜しまない看護婦さん達が、今日もそれぞれの場で立ち働いています。今度病院へ行った時、迎えてくれる看護婦さん達の後ろに、きつと、中澤さんを重ねてしまうような気がします。

（森下えつ子）

## ナイチンゲール誓詞

我はここに集ひたる人々の前に  
厳かに神に誓はん

わが生涯を清く過し、わが任務を忠実に  
尽くさん

我は全て毒あるもの、害あるものを絶ち、悪  
しき薬を用ひることなく、また知りつづ  
れをすすむべし。

我はわが力の限りわが任務の標準を高くせ  
んことを努むべし。わが任務にあたりて、取  
り扱へる人々の私事のすべて、わが知り得た  
る一家の内事のすべて、我は人に洩らざる  
べし。

我は心より医師を助け、わが手に託された  
る人々の幸のために身を献げん。

出典 西田 兎著  
「ステキなナースは素敵人間」より



# “グレート・ハーモニーの国” のジグソーパズル

—中国・北京市宣武区を訪ねて—

団長 井上孝代 ● 北京

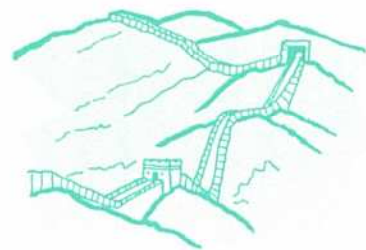
## 北京の足跡と思い出

「日本に帰られますとき、どうぞ“足跡”と“思い出”以外は何も残さないようにお願いします！」

研修を終えて日本への帰路、北京空港からの出発を前に、旅行中ずっとユーモラスな通訳ぶりを発揮してくれた何光さんにはこやかにこう注意を促した。

その言葉に振り返ると、高く澄み渡った青空と、それまで自分たち自身で見たり、聞いたり、体験した北京の市街がひときわ大きな広がりをもって迫ってきた。そして、確かに私たちはあの北京の街に自分たちの“足跡”を残したのだという感慨が湧いてきた。

第四期北区女性海外派遣事業・北京市宣武区派遣団としての我々の“足跡”とは、宣武区人民政府表敬訪問、宣武区婦女連合会・女性起業家との交流、北京市第15中学見学訪問、自然博物館見学、三教寺幼稚園参観、桜桃園市場等見学・働く女性との懇談、家庭訪問など一連の研修・交流活動である。



## 「女傑」=女性起業家たち

これらの活動の中で私自身が最も強く関心を持っていたのは、高層建築が目立ち、著しい変貌を遂げつつある北京の女性たちと交流することによって、まさに変革期の中国の女性たちの生活と生き方に触れるということであった。中国は政治・経済の分野にも女性の進出がめざましく、何しろ'95年には北京で第4回世界女性会議が開催された国柄である。きっと社会参画を遂げている強い女性たちに会えるに違いない。そう思うと出発前から期待に胸が膨らんだ。

その目的は婦女連合会の女性起業家及び働く女性との懇談・交流を通してかなえられた。懇談会で出会った女性たちは、狭い間口の店から大きな会社（会社）に発展させた起業家、一販売員からスタートし、今は600人の従業員を擁するデパートの社長、いくつかの子会社を束ねる建設会社組合幹部など、文化大革命を身を持って体験したのちに現在の肩書きにまで登り詰めた、“女傑”といわれる女性たちである。

彼女たちは簡素なパンツスーツ姿でむしろ謙虚な物腰であるが、ある種の威厳をもって、相手の目をじっと見つめながら話すという共通の印象があった。話の内容にも共通点がある。それは、「働くことは大変だが

楽しい。退職しても何か社会で活動したい。そうでないと社会とのつながりがなくなり寂しい」というものである。一人の女性がこう発言するとほかの女性たちも深くうなずいていた。

そういえば、参観した三教寺幼稚園の保育さん、自由市場の若い女性の販売員さんにも、とくに着飾っているわけではないが働く人の健康な精気のようなもの、色気があったような気がする。女性が社会的役割をもちながら自分の人生を生きていくことの意味を考えさせられる言葉である。

ただ、有数の起業家の彼女たちをもってしても、「週末には老親の世話もしたいし、いつも忙しいのに、夫は洗濯機ぐらいしか動かしてくれません」と、家庭と職業の両立の難しさをのぞかせていた。

女性が男性と等しい社会的地位を得ているその一方で、政治体制や文化は異なっても女性として我々と同じような問題を抱えているらしいことに共感を覚えた。

ある経営者は、「従業員は4時に帰しても、自分は毎日夜の10時頃まで働く」という。女性起業家としての成功の秘訣を問われて、彼女はきっと「結局、本人のやる気と努力にかかっているのです」と結んだ。



## 中国女性とこころ

短い研修期間は瞬く間に過ぎてゆく。たくさんを感じていながらも、未消化な思いのままにいたころ、中国でも最高峰の学問の府といわれる清華大学の女性心理学者と会う機会を得た。彼女はまず、最新式のコンピュータがびっしり詰まった図書館の情報センターを案内してくれた。

そこは、とれたての野菜が売り買いされる市街の朝市の喧噪とは全く異質な現代空間であった。

コンピュータを駆使する青年たちの表情は、山積みの野菜を荷車にのせて朝市に向かう青年たちの素朴な感じの表情とは明らかに違うものであった。

彼女は、「80年代からの一人っ子政策の申し子たちがちょうど成人を迎えています。これから中国では青少年の問題、特に心の発達の問題が重要な研究課題です」「中国人の心の問題はあくまで東洋人としての中国らしい方法で対処していきたい」と強調した。私はこの“東洋人としての中国らしい方法”という言葉に強く惹かれた。

私は社会で男性と同等に働く“中国の強い女性”に会いに来たはずである。たしかに起業家や教育者など社会で活躍する女性と交流すること

ができた。しかし、彼女たちを“強い女性”とだけ一面的にとらえることができるのだろうか？ とくに“中国の”と限定することに意味があるのだろうか？ 昼間の懇談会では建設会社の組合幹部としてお話しした石陽さんは、その夜家庭訪問したときには、仕事のため失明されたご夫君にやさしく寄り添う、昼間とは別の、妻としての表情であった。

失明後は家におられるご夫君は、毎日ラジオから得た経済・政治・世界の動きを妻に伝え、そのことで忙しい妻の仕事をサポートすることが自分の務めであるといわれる。

心動かされたことがもうひとつある。その夜、石陽さん宅に集まった他の三人の女性起業家を加えた女性四人は、文化大革命のとき地方で12年間若い日々を一緒に過ごした、まさに同志たちであるという。「私たちは姉妹以上の関係です」といい、どの女性も石陽さんのご夫君に対し、本当に自分の身内のように行き届いた心の配りようだった。

私たちは、お二人の夫婦愛と友情に何度も乾杯した。

## グレート・ハーモニーの国

私たちはその夜の交流の一つ一つの場面を帰国した今もよく思い出し、そのたびに何かしら温かなぬくもりに包まれる。そして、研修旅行中に

体験したいくつもの場面がまるでジグソーパズルの一片一片のように感じられる。

朝7時過ぎにはおびたしい自転車が行き交う生活のエネルギー、決して安価とはいえないのに増えてきたというハンバーガー・ピザの店の賑わい、天安門広場で国旗が降ろされる瞬間を見ようと1時間前から寒さの中じっと待っている人の群、それらの生活場面のそれぞれが意味をもち、つながりをもっているように思える。

以前、外国の友人が来日の折、日本の印象を“ハーモニーの国”と表現したことがある。あらゆるものが調和のなかにあると言いたかったのだろう。

私は、日本がハーモニーの国だとしたら、広大な国土に56もの民族が生活する中国は、古さも新しさも、大きなものも小さなものもすべてを内包しつつ変化する“グレート・ハーモニーの国”だと思った。中国は、その国らしく大いなる調和をもちつつ動いているのに違いない、そのなかのジグソーパズルの一片だけを取り上げて、早急に日本と比較したり結論づけてはならないのだという気がする。

私は今回の中国の女性たちとの交流を通して、私たち日本における女性の生き方に対して、これから時間をかけて考えていくべき貴重な視点と励ましを得たように思う。その意味で、北京に残した“足跡”と“思い出”を今後の活動に精一杯生かしていきたいと念じている。

## アゼリアプラネット「女性センター相談室から」

女性センター相談室は開設して6年になりますが、自分自身のことや夫婦・家族のことで、ご相談にみえる方がふえています。

相談室では「女性がイキイキ生きるには」をモットーにして、ご相談者のお話にじっくり耳を傾けることを大切にしています。

ご自分のために何か一歩を踏み出したいとお思ひの方は、どうぞお気軽にお電話下さい。

あなたは最近、イキイキ、ワクワクしたことがありますか？ 何かを書き出してみてください。どうでしたか？ いくつ書き出せましたか。案外スラスラ書けた。苦労してやっと書けた…。

あなたは毎日「やるべきこと」「やらなくてはいけないこと」にとらわれていませんか？ 周囲の人の期待に応えることに多くの時間とエネルギーを使っていますか。

確かに自分の責任を果たすことや、周囲の人たちへの気配りも大切なことですが、それだけではストレスがたまっています。

目を閉じて、少し自分の気分や体に耳をすませて下さい。体が疲れていた、イライラしたり、落ち込んだり、たえずビリビリしていませんか。こんな状態では体も気持ちも擦り切れてしまいます。試しに今日一日のあなたの行動を詳しく書き出してみてください。その中で、あなたにしか出来ないこと、他の人がやるべきこと、今やらなくてもよいこと、他の人に任せてよいものをチェックしてみてください。

自分のための行動や時間がどれ位ありましたか。案外楽しんでる自分に

気づいた方、ため息が出て「ああ、やっぱり自分のための時間なんて取るのは無理」とあきらめムードの方と、いろいろだと思います。ため息が出た方は、何が時間をとったり、楽しむことを邪魔しているのでしょうか。過去から引きずってきたさまざまな習慣や思い込みにとらわれていることが案外多いような気がします。「男性は仕事・女性は家事」に始まり、「男は強く・女は優しく」として、「良妻賢母が女性の理想像」といった数多くの幻想が男女を問わず依然としてあるようです。

今まで女性が自己主張すれば、「ヒステリック」「子どもっぽい」「女じゃな

い」。同性からすらも「冷たい」「エゴイスト」「無責任」といった言葉で片付けられてきました。自分の感情や欲求を持つことはいけないことと思ひ込まされてきました。

けれども他人からの要求にかかわりなく、自分の時間やエネルギーをどのように使うかを決めるのは、自分自身だと思ひませんか。

「私」は自分の人生の船長です。自分にとって何が大切かを決めることが出来ます。時には「NO」ということで、自分自身を守り、表現することが出来るのです。

### ■アゼリアプラネット(女性センター)各種相談

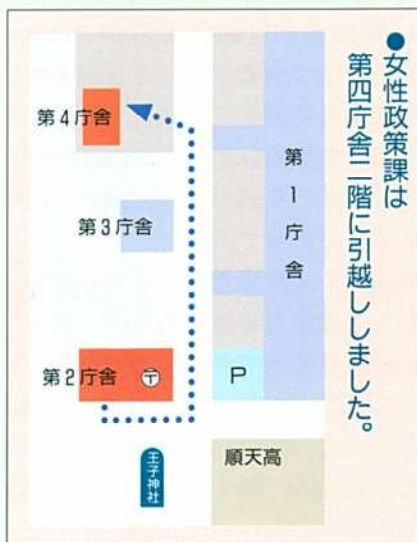
| 相談内容 | 心の相談                           | 法律相談                           | 体の相談               |
|------|--------------------------------|--------------------------------|--------------------|
| 相談日時 | 毎週水曜日 午後3時～7時<br>毎週金曜日 午後1時～5時 | 毎月第1土曜日<br>午前9時30分～<br>午後0時30分 | 毎月第1火曜日<br>午後2時～5時 |
| 相談員  | 女性心理カウンセラー                     | 女性弁護士                          | 女性産婦人科医師           |
| 予約方法 | 上記の相談日時に<br>電話で予約              | 随時予約受付                         | 随時予約受付             |
| 予約電話 | (3913)0015 (相談室専用)             | (3913)0161                     | (3913)0161         |

## Azalea NO 15

発行/東京都北区総務部女性政策課  
〒114-8508  
北区王子本町1-15-22  
Tel.03-3908-1111  
内線 2221・2222

企画・編集/アゼリア編集委員会  
区民編集委員  
小田原淑子 鈴木れい子  
醍醐麗子 田島加代子  
館江順子 時田靖子  
森下えつ子

写真/小田原淑子  
制作協力/(株)みづほ



私にとって女性の自立とは？ 男女平等ってどういうことだろう？ 女性問題には素人の区民編集委員が、自問しつつ作ってきたアゼリア。

「それはそうね。でも、だから何？ 何が言いたいのか？」そんな読者の声になづきながら、考え続けた。

経過がそのまま冊子になっていたように思っています。次号からは新しい紙面に衣替えます。

これまで読んで下さった皆様、取材に応じて下さった区民の皆様へ深くお礼申し上げます。ありがとうございました。

編集後記